

セカンドキャリアの達人に聞く

金①
～載
月連

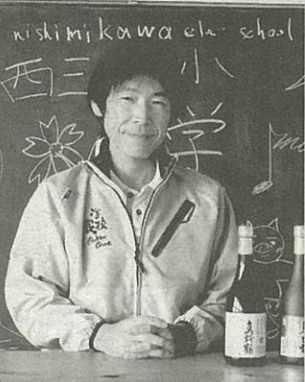
明治25年(1892)創業の尾畑酒造(新潟県佐渡市)で社長をつとめる平島健さん(55)。

「(妻の)実家を継ぐつもりで入社した。過酷でしたが、仕事量も熱量もあつて、一つの雑誌が出来上がるまで読者から反応があつたと嬉しかったですね。今考えるとあれが青春時代の1ページだったんだなと思います」

95年、結婚を機に出版社を退職し、妻(尾畑留美子さん)の実家である『真野鶴』の醸造元・尾畑酒造に入社。夫婦で佐渡に渡った。

尾畑酒造(新潟県佐渡市)代表取締役社長 平島健さん

雑誌編集者から酒造り通し佐渡を盛り上げる 妻の実家の酒蔵へ



学校蔵にも取り組む平島さん。⑤は真野鶴の花見酒シリーズ

「日本酒業界は、長いスパンでずっと縮小している業界だった。雑誌の仕事は、ちょうどバブル末期までだったので、右肩上がり。『東京ウォーカー』なんて、ものすごく売れていました。好景気な業界から、なかなか伸び代がない難しい業界に入ったなと感じました」

日本酒の国内市場が縮小する中、妻の留美子さんとともに、国内外の販路の多様化に積極的に取り組んだ。酒造りの現場や営業の仕事などを経て2008年平島さんは、社長に就任した。

「経営理念は、『幸福心』(こうじょうしん)。幸せを醸す心という造語ですが、酒造りを通して多くの方々に幸せを届けていきたい」

14年には佐渡の廃校を酒蔵に再生した「学校蔵プロジェクト」をスタート。「酒造り」「学び」「共生」「交流」の4つの希望の一つになるといいなと思っています。こんなに面白いことができるんだよと」

アイラ島がスコッチウイスキーの聖地とされるように、佐渡も特別な場所になることが平島さんの夢だという。目下の経営環境で気になるのは、新型コロナウイルスの影響だ。「飲食店にお客さんが来ないとお酒も消費されないで、やはり影響は出ています。3月に入ってから出荷数は落ちてきているが、一方で家で晩酌をする人もいる」

自宅でも花見気分を味わってもらいたいと花の絵柄をラベルにあらわしたシリーズを3月30日に発売した。桜の柄は、蔵の近くの真野公園の桜をイメージした。「観光関係は今どこも厳しいが、状況が本当に落ち着いたら歩いているだけで、その際は、新潟・佐渡を運んでいただけたら」

(ジャーナリスト 渡辺タカコ)